

令和5年度「県民のつどい・公開講演会」講演について

時：令和5年11月16日(木)午後3時から

場所：仙台市青葉区旭ヶ丘

日立システムズホール仙台シアターホール

講師：川名 壮志 氏

演題：「学校で起きる子供の事件」

初めまして。毎日新聞の記者の川名と申します。

普段、人の話を聴く仕事をしてまして、自分でしゃべるといことは余り機会として恵まれていないものですから、ちょっとつたないかもしれませんが、その点ご容赦下さい。どうぞよろしくお願い致します。

このマイクですが、後ろの方も聞こえますかね、このぐらゐの感じで。もし小さければおっしゃっていただければ大きくしますので、どうぞよろしくお願い致します。

今日、こちらに招かれて伺ったんですけど、実は、仙台市って、ほとんど来たことがなくて、まさか新幹線で東京から1時間半で着くと思ってなくて、ちょっとびっくりしました。

今日も寒いかどうか分からなくて、いまジャケットだけ羽織ってるんですけど、じつはセーターを持ってきて、ホッカイロも二つ持ってきて、かなり雪でも降りそうな感じで来たら、意外に東京よりも暖かくてびっくりしています。

あの逆にこれから長崎の話をするのですが、皆さん長崎って遠くに感じるんじゃないかなと思います。なるべくその辺のところが身近に感じられるように話をしたいと思っております。

今日、タイトルで言うと、「学校で起きる子供の事件」というタイトルにしています。

でも、この子どもと事件って、本来は結びつけない言葉ですよ。

さらに今日話すのは、マスコミの人間でもあると、学校と事件とマスコミって、本来ならば一番結びつけない組み合わせの話をこれからすることになります。

犯罪被害者支援の週間に、こういう講演っていっぱいあるんですけども、本来であれば、こういう講演の時って、被害者の話、あるいは子供を失った親の話、今回学校で起きるということですから、学校の先生の話をお聴くのが、一番多いパターンなんじゃないかなと思います。

私は当事者ではない、なおかつ新聞記者でもあります。

皆さんもイメージとして持っていらっしゃると思いますが、新聞記者というどちらかという被害者を傷つけるイメージ、加害者側の立場の人間なんじゃないかと思ひます。その点、そういう面もおそらくあると思ひます。

そこは、じゃあ、なんでお前がこんな所にしゃしゃり出てくるのかということにもつながると思ひますけども、そこをうまく話せればなと思ひています。

その一方で最初に90分かなり長い話なので、皆さんも気楽に聴いていただければと思うんですけど、おそらく、ちょっと僕思うんですけど、新聞記者、新聞記者っていうんですけど、新聞記者のイメージって皆さんがもっているイメージと、実際の新聞記者がやってる記者のイメージって結構違うんじゃないかと思ったりもするんですね。

新聞記者っていうと、正義感をもっている人とかジャーナリスティックに思われがちなんですけど、案外、日本の新聞記者ってそんなことはないんですよ。

僕自身もなぜ新聞記者になったかという、まったく大学時代ジャーナリストの勉強をしたわけでもないし、文章を書くのも好きだったわけではない。ましてや社会正義って言ったら、は？なんのこっちゃっていう感じの学生でした。

じゃあなんで新聞社を受けたのか？という理由は簡単なんです。そこしか受けるところがなかったんですね。

これあの、実は日本のマスコミってですね、対象年齢、その応募資格のある年齢がかなり高めなんですよね。今も変わらないと思いますが、25～6歳位まで、新入社員扱いで入社試験を受けることができるんです。

で、僕は、大学に、全く勉強してなかったわけではなくて、大学の卒業試験に、卒業単位をとれなくて、小中高大の6-3-3-4のはずが、6-3-3-6だったんですね。6年大学にいて、そうすると他の一般企業だと対象年齢からこぼれちゃうんですよ。門前払いを食っちゃうので、新聞社であれば、年齢制限に引っかからないのでってことを誰かに知恵つけられて、それで受けて、たまたまひっかかったというのが実のところですよ。

これって僕が例外なわけじゃなくて、案外そんな理由から新聞社を受けて、たまたまひっかかってくる人がいると思います。新聞記者って意外にそんなもので、だからあの、最近あんまりみんな立派なことを言いすぎてるので、怖いんですけど、そもそも立派な人間でない人が新聞記者になっているわけではないくらいに思っていた方がいいんじゃないかなと思います。

一方で、新聞社ってでかいことはでかいんですよ。毎日新聞、いわゆる全国紙って、朝日、読売、毎日新聞とありますけれども、読売新聞が一番販売部数が多いんですけど、毎日新聞でも社員は2000人弱いるんですよ。いまだれぐらいかな、販売部数も200万部くらいはあって、全国はもちろん海外にもニューヨークやワシントン、パリとかロンドンとかにも駐在があってネットワークも広いので、かなり大きなイメージはあると思うんです。

たとえば東京本社、いま僕東京本社、夕刊の担当でいるんですけど、東京本社でいうと、社会部だったら80人位かな、政治部だったら60人、経済部があって、学芸部があって、科学環境部があって、写真専門の写真部というところがあったり、あと整理、見出しをつけるような部門もあったりとか、各部門が多岐にわたっているんですよ。

じゃあ、そういうところにその新卒の新聞記者が行けるかっていうと行けるわけがないんですね。そもそも新人は、本社にあがれなくて支局に放り出されるんです。

僕はさっき、あの、東京の大学を卒業を、みたいな、ちょっと格好いい経歴みたいに説明をされましたけれども、たまたま僕東京に住んでいて、生まれが長野だったもんですから、ほとんどその辺から出たことがなかったんですけども、初任地がいきなり九州の長崎の佐世保でした。全く縁もゆかりもないところに飛ばされたわけです。

全国紙の全国というのは、テレビの例えば民放キー局とは違うんですね。民放キー局だと新人でもいきなり中継で、東京駅から中継ですみたいなことをできるんですけども、全国紙の全国というのは、要するに日本全国津々浦々にとばされますよ、というそういう意味合いなんですよ。

で僕は最初に長崎の佐世保に行きました。おそらく、他の社も含めて、宮城県だと仙台支局・仙台総局というところになると思うんですけども、そこに新人が配属されてるんですね。

仙台市って、さっきびっくりしたんですけど、100万人の人口がいるわけですよ、毎日新聞でちょっとみたら、社員が仙台支局で7人しかいませんでした。だから単純に、10万人に一人という扱いで、10万ちょっとで一人ってな感じで記者が配属されているということになると思います。だからその辺はすごく皆さんも会う機会がないんじゃないかなと思います。

いまから話す話は長崎の佐世保の話なんですけれども、佐世保支局局で、僕が入社して4年目の時の話です。今日は警察学校の方も来られているという話を伺いましたけれども、新人で警察でも新聞記者でも会社員でも、そこに染まっていないんですよ。むしろ社会人デビューしたての右も左もわからない状況・状態っていうのがたぶん新人だと思うんですけども、その時期に僕が体験した話になります。

ですので、新聞記者の仕事が関わる一方で、ごく私的なプライベートな話にも重なり合います。そしてその意味ではだれにでも起こりうる話という風にも言えるのかもしれませんが。ぜひ身近な話として聴いていただければなと思ってます。

僕が佐世保支局に配属されたのが2001年のことでした。2001年に入社したんですが2005年までいたんですけども、2001年っていうとアメリカ同時多発テロがあった年、小泉純一郎さんが首相になった年です。

事件が起きたのが2004年です。いまちょっと先程聞いたら、2005年ですかね、仙台市でも、アーケード街で通り魔事件があって、でさっき作文の発表もあったと伺ったんですけども、飲酒運転の車が仙台育英の高校生の列に突っ込んだっていうのが2005年だと思います。

佐世保の話はその前年2004年になります。

長崎県にも長崎支局てのが親支局があるんですけども、佐世保支局っていうところなんですよ。県庁所在地でもないの、本当に小さいんです。佐世保って長崎のなかでは長崎市について大きな都市なんですけれども、人口は25万人程度しかいません。だからちょうど宮城県でいえば石巻市に近いと思います。石巻市と同じ人口のところで、海があって、養殖ガキが有名でっていうようなところが佐世保です。

そこに僕は新人で配属されて5年間そこにいました。

2004年当時でいえば、支局長兼デスクの御手洗さんという人と、僕と、もう一人新人の記者が入って来て、あと事務の女性、この4人できりもりしていました。たった4人なので、支局もビルじゃないんですよ。

これが毎日新聞の佐世保支局なんですけれども、見えますでしょうか。3階建てになっています。1階の部分がくりぬいてあるのがわかりますかね？1階の部分が実は駐車場です。で駐車場といっても来客用の駐車場ではなく支局の記者の使う車ですね、長崎だとほとんど電車とか公共交通機関がないので、結局取材先に向かうときには車が絶対に必要になって、それで新人の記者も含めて3人で、新人と僕と支局長の車3台が1階に、駐車場を作って停めてあるわけですね。非常にこじんまりとしているんです。

で、2階が支局になっていて、支局といっても、このステージの多分3分の一位のスペースしかないと思います。そこに机が4つあって、来客用のソファがあって、ちょっと窓がみえますけど、窓にちょっと棚があって、そこにテレビをおいてるんですね。新聞社の場合、NHKをいつも垂れ流しにしているっていう習慣があって、要は突然事件が発生した場合にNHKでニュース速報で字幕が出ますよね。あの字幕を見るためにNHKをつけっぱなしにしているんです。

だいたいこの3分の一のスペースに、4人で仕事をしているという感じですかね。非常に狭いです。で、これ3階建てって言いましたけど、じゃあ3階はなにになっているかっていうと、これ、家なんです。家っていうと何かっていうと、ここに支局長が住んでいるんです。2LDKぐらいかな。2LDKぐらいの部屋で、その3階に支局長が住んで暮らしている。

だから、なんていうか、今日警察学校の方もいらっしゃっているという話だったんですけど、どっちかという支局って交番みたいなんですよ。交番勤務みたいな感じで、あるいは駐在所かな。一人の警察官が寝泊まりをしているような感じ、生活をしているようなところ、それがまあ新聞社の支局と似ているんですよ。

そこで記者が集まって、問屋制家内工業みたいな感じで仕事をしているっていうのが支局になります。

だから全国紙って言っても、全然支局に行っちゃうとレベルの規模が小さいんですよ。本当にこじんまりとして、家庭的な雰囲気仕事をしているんです。

2004年当時にこの3階に住んでいたのが御手洗さんという、御手洗恭二さんという支局長でした。20年めのベテランです。

御手洗さんはこの3階に、中学3年生の息子さんと小学6年生の御手洗怜美ちゃんという女の子と3人で暮らしてました。なんで3人で暮らしていたかという、奥さんをその前年にガンで亡くされていたんですね。ガンで奥さんを亡くされていて、なおかつ子供がいて、本人は新聞記者。

まあ新聞記者、いい加減な仕事ではあるんですが、忙しい仕事ではあるので、子育てをするには大変なわけです。その時に、この支局のビルというか雑居ビルというか、この支局のつくりって非常に便利なんですよ。24時間ここにいられますし、朝起きたら、朝起きて仕事の時は3階から2階へ下りればいいうけですし、仕事が終わったら2階から3階へ上がればいいうし、その間に飯を子

供のために作らなければいけないんですけど、飯を作るという理由で3階に上がるということも全然できるわけですね。

もし飯を作っている途中に大きな事件あったら、すぐ2階に下りればいいだけの話なので、非常に便利だったんです。

そういう意味もあって、御手洗さんはこの佐世保支局の支局長を務めていました。

あの一、3人で、さっき仙台市100万人で記者7人って言いましたけど、佐世保25万人で3人で、じゃあそれで回るのかということとなんとかなるんですね。

どうしてかっていうと、支局の仕事って、皆さん新聞を取っていらっしゃる方ってどれくらいいるかわからないんですけど、新聞は見たことあると思うんですけど、大体今日でいうと、新聞の一面ってどんなニュースが載っているかということ、イスラエル軍のガザ侵入の話・突入の話、GDPの話、バイデン大統領と中国の習近平国家主席の対談みたいな話が載ってるわけですね。

これって、要は外信部と経済部が書いている記事ですよ。社会面の方をみると、警視庁のネタがあったり、ジャニーズの話があったり、歌舞伎町の路上買春の話があったり、これも東京の社会部が書いている記事なんですね。

じゃあ仙台支局の記者が何を書いているかということ、テレビ欄の方から4ページ目くらいかな、4ページ目くらいに宮城県版という地方版があるわけですね。ここを主に、仙台支局、地方支局の記者が担当して書くわけです。今日でいうと、宮城県の大崎市の古川学園で連続窃盗があったとか、ちょっと隣の県ですけど、愛媛のじゃこ天を秋田の知事がPRしたとか、そういう記事が載っているわけですね。まあ何と言いましょ、要はタウン誌とそんなに変わらないわけですね。

大学卒業したての記者でも書けないわけじゃない記事をニュースを記事にしているというのが、地方支局の仕事になります。

当日の紙面というのも、新人の記者が取材はするんですけど、それをベテランのデスクが、佐世保支局の場合御手洗さんがチェックして、商品になる程度に原稿を直して、さらに整理が見出しをつけるみたいな、そういうことをするので、新人が入ったとしてもなんとかなるんですね。

地方版のミニニュースを書くぐらいですので、さっき言った一面で記事を書くとか社会面の頭で記事を書くとか、ということにはほぼないわけです。一年にあって数回、一回あるかないかっていうようなのがやっぱ支局なんですよ。

当時僕20代で独身だったので、よく2階から3階に上がってたんです。というのは、3階でデスクの御手洗さんが子供に飯を作るんですね。その飯にご相伴に預かっていた、一緒に飯を食べていたということなんです。飯を食って、九州なので焼酎なんですね、芋焼酎と一緒に飲んでワイワイやるってようなことをして、非常に牧歌的でした。

御手洗さんとの関係っていうのは、なんていうんでしょう、徒弟制という言いすぎですけども、なんかその親分と子分てみたいなそんな感じですかね。年次も20年弱も離れているので頭が上がらない、そこで子供の方が僕と年齢が近いという感じです。

そこにはもう御手洗さん一家がいつもいたというような感じでした。

その小学校6年生の御手洗怜美ちゃんという子は、いつもその支局にいたんですね。支局というときに、その支局って3階ではないんです。2階なんですね。ランドセルを背負って帰ってくると、その階段、その入口の階段のところからトントントンと、子供ならではの軽い靴音がして、「ただいま」で怜美ちゃんがいうのは、そしてドアを開けるのは、3階じゃなくて2階なんですね。

なぜかという、2階にお父さんである御手洗さんがいるので、でそのまま自宅に上がらずに、さっき言った来客用のソファとかに寝転がって本を読んだりとか、テレビ、NHKつけっぱなしのところをチャンネルを替えて自分の好きなアニメを見たりとか、そんなことをしてて、まあそれもゆるされるような、緩い雰囲気毎日過ぎていたんです。

本当に牧歌的で、ある日に書いた記事っていうのは、僕が書いた記事っていうのは、こんな記事でした。「アジサイ咲いた」っていう、6月、まあ5月か、ちょうど梅雨の時期になると、アジサイの花が咲くんですね。でアジサイの名所があって、アジサイの名所まで車を走らせて、雨が降っている時に、傘を差した子供がいたので、傘を差したこどもと一緒にアジサイの写真を撮って、「アジサイ咲いた」っていう、絵解きって言うんですけど、写真ものの記事を載せて、まあそれが良い記事じゃねえか、みたいなことを御手洗さんに褒められたりとかして、ちょうどその時記者4年目でしたけど、なんか仕事も慣れてきて、まあこんな生活も悪くないな、なんて思い始めていた頃でした。ただ、2004年6月1日の事でした。一本の電話、昼過ぎに来た電話が多くの人々の人生を変えてしまいました。

「大久保小学校で子どもが怪我をしたみたいですよ。子どもが救急車で運ばれたそうです。」という電話がまず僕の携帯にかかってきました。かけてきたのは新人の一年生の記者でした。「どういうこと」と思ったんですけど、一年生なので、かなりパニックッていて、上ずった声で警察から聞いたっていうんですね。

子供と警察ってやっぱり結びつけないんです。思わず「本当なの？間違いはない？」って聞いたんです。そしたら、その一年生が「間違いありません。警察署で副署長に確認しました」っていうんですね。

警察署の副署長っていうのは、立場で言えば広報対応の立場なんですね。であるから広報立場の、広報対応する立場の副署長が言ったということであれば、もう間違いのないわけです。

「子どもが怪我をした。救急車で運ばれた。」って言われて、嫌だな、と思ったんです。というのはその大久保小学校というのは怜美ちゃんが通っている小学校だったんですね。この小学校っていうのは、すごく小さな小学校で、一学年一学級しかない小学校だったんです。130人位かな、全校生徒で。

なんだろう、いやだなって思っていたら、またその一年生から僕に電話がかかってきて、「女の子死んだみたいです」って彼が言ったんです。もう絶句ですよ。僕当時ですね、佐世保に4年いたんですけども、殺人事件の取材ってまともにしたことがなかったんですね。ほぼなかったと言っていいと思います。

僕自身も、たぶん相当に慌てたんだと思います。当時人口2万人位の町の予算の取材を僕はしてい

たんですけども、慌てて車で支局に戻って、支局に駆け上がると、この2階に御手洗さんがいないんですね。

さっき御手洗さんデスクって言い方しましたけれども、デスクって、下の記者の記事を見るのが役割ですけども、なんでデスクかって名前なのかっていうと、外に出ずに机にへばりついているからデスクだって言うくらい、本来は外にでない立場の人なんですね。また、もともと御手洗さんっていう人自身も出不精な人だったので、普段はもうほとんどこの支局のなかで生活しているような人だったので、その御手洗さんがこの緊急時にいない。なんか嫌だなっていう感覚と、なんでこんな時にいないんだよっていうイラつきと混ざったような感覚だったと思います。

それでヤキモキしている時に、御手洗さんから今度は電話がありました。で彼が言ったのは「怜美が死んだ。」たった一言でした。その言葉ってのは抑揚もなく、タンタンとして、僕は聞いたけど意味が分かりませんでした。何を言っているのか、ちょっと僕には、なんていうんでしょう、頭に入ってこなかったんですね。僕が黙っていると、また「怜美が死んだ」って御手洗さんが言って、電話が切れた。それからしばらくして御手洗さんが支局に戻ってきました。彼が開口一番に言ったのは、「多分事件だわ、会社に連絡して。」彼はそう言ったんですね。それだけ言うとあとは何も言わずに、背中を向けてとぼとぼと警察にいつてしまったんです。この佐世保支局の隣がA級署である佐世保警察署だったんですね。佐世保警察署の方に入っていっちゃった。その時の背中ってのはやっぱり忘れられないですね。

少し時間を戻します。次に御手洗さんに会った、時間を戻すというか、その後半年くらい、御手洗さん、いっさい支局に上がらなくなっちゃいました。記者ではなく遺族になったわけです。その時に呆然としたんですけど。

次に御手洗さんに会った時ってのはテレビの中でした。記者会見をしていたんですね。その日の夜9時の事でした。NHKニュースにでていたんですね。会見の様子で。

そこにいたのは、スーツを着てネクタイを締めていた御手洗さんでした。普段は支局でスエットとか、夏はランニングシャツの人なんですけど、昔ながらの記者で、入社試験でもネクタイを締めなかったということが自慢の一つだったんです。でその彼がスーツを着てネクタイを締めて固い表情で記者会見に臨んでいました。

事件について淡々と語っていました。なんかそれまで見ていた御手洗さんと全く違う別人。なんというのでしょうか。見たのがテレビの画面の中だったので、全然僕自身に、現実感がないわけですね。

御手洗さんに開口一番「多分事件だわ、会社に電話して」って言われて、僕は慌てて本社に電話したんです。

本社のとにかく一番偉い人にまず伝えなければと思ったんですね。御手洗さんの娘さんが亡くなった、このことを自分が知りうる一番肩書の偉い人というかな、トップの人につたえなければと思って、本社に電話したんです。

本社って長崎だと西部本社ってところにありますので、本社って福岡にあるんですね。福岡総局の記者部門の一番偉い人が報道部長というんですけど、報道部長とにかく伝えなきゃと思って、当

時はまだ携帯ではなくて固定電話の時代でしたので、本社に電話して、「御手洗さんの娘が亡くなりました。報道部長に繋いでください」ということを電話で言うわけですね。でも本社の方で、その電話を報道部長に繋いでくれないんです。で最初に出た記者は別の記者に渡して、別の記者は今度は本社にもデスクがいるので、本社のデスクに渡して、っていう風にたらいまわしにされるわけですね。

当時僕記者4年目で、すごく腹が立って、俺の言うことが信じられないのか？って思ったんですね。あまりに突飛な信じられない話なので、僕が言っていることを本社の人間は信じてくれないんだと思ったんです。ふざけんな、と思って、早く報道部長を出せと思っていたら、今度はまた別のデスクがでてきて、僕に間違いないのか、って聞くんです。腹が立ってしょうがないので、間違いありません。御手洗さん本人に聞きましたから、って言ったんですね。

そしたら、デスクが、じゃあ原稿吹き込んでって言ったんですね。「ええ〜」って思って、壁にかかっている時計をみたら、午後一時半過ぎだったんですね。えーっと、夕刊の締め切りギリギリなんです。ぎりぎり原稿を書く暇がないから、電話で口頭で原稿を吹き込め、勸進帳っていうんですけど、それをやれって言われたんですね。足が震えました。同時に怒りが沸き立ちました。そしてまた、初めて、自分が新聞記者なんだなって実感しました。

その時に書いた記事が、見えますかね、「小6 女児切られ死亡」という記事です。この記事って実はすごく変なレイアウトなのって、わかりますかね。

実は、この左側が原稿なんですけど、10字づめで20行しかないんですね。要は200字しかない原稿なんです。普通だったら、ベタ記事のはずなんです。それをやはり紙ってレイアウトがすごく大事で、1段4行にすることで、(1, 2, 3, 4, 5) 5段の記事にしてる訳ですね。5段の記事になればどうなるかという、右側の「小6 女児切られ死亡」というのが、5段の見出しになるんですね。たった200字の記事でも、段を5段にすることで、これが大きなニュースであるってことを伝えているわけです。これが新聞のアナログ的なところだと思うんですけども、たった200字の記事で、原稿の内容もすごく曖昧なものなんですけども、ニュースの大きさを伝えているんです。

この記事って、実はすごく不思議な記事でもあって、ちょっと見えづらいかもしれないので、読みますと、「一日午後0時58分ごろ、長崎県佐世保市の大久保小学校から、小6の女児が同級生から刃物で切られ死亡した、と佐世保署に通報があった。」っていう書き方がされているんですね。

どういうことかっていうと、通報までしかされていない。通常新聞記者が記事を書く時ってのは、警察署からの広報文の発表をもって記事にするんですね。紙が一枚っぺらみたいなのが流れてきて、こういう事件がありました、こういう交通事故がありました、というものを警察署が発表して、それに基づいて記事を書くんですけども、この段階では、その広報文すらできていない、通報だけっていうことなんですね。

「切られたのは同小6年の毎日新聞佐世保支局長御手洗恭二さんの長女怜美さん」と書いてあるんですけども、小6の女児が同級生から刃物で切られていってるんですけども、同級生ってのが男の子なのか女の子なのかも書いていない。「同署の調べでは、体中に傷があった」と書いてあるんですけど、体中に傷があるって、どこだよ、っていうことになりますよね。通常であればデスクから



怒られるようね原稿なんです。甘い、曖昧過ぎる、取材があまい、って。ただ夕刊の締め切りギリギリだったので、それでもこれをニュースとして突っ込んでいますね。

ご存知の方もいると思うんですけども、この加害者は怜美ちゃんと同級生の女の子でした。まだ11歳でした。

当時あの少年 A とか酒鬼薔薇少年っていうのが有名だったと思うんですけど、彼が犯行当時14歳でしたから、それよりも3歳も下の女の子、しかも小学生、しかも女の子、ということですよ。給食の時間に、空き教室に怜美ちゃんを呼び出してカッターで首を切り付けてました。つまり学校が事件の現場になっていて、しかも昼日中、子供たちも先生もいた時間帯だった。カッターは自宅から持参したもので、なおかつ空き教室に呼び出していた。はずみではない。ある程度の殺意は持っていたということなのです。殺人事件ということですよ。11歳の女の子が、どういうことってなりますよね。

当時、いろいろ聞き込みをしているんですけども、大体の保護者や先生が言っていたのは、加害少女は目立たない女の子でした。どこにでもいる普通の女の子でしたっていうんですね。

当時毎日新聞も、小学校6年の担任の先生にアンケートを取っていて、そのアンケート結果によると、約8割の担任の先生が、自分のクラスでも起こり得るという回答をしているわけです。確かに子供同士、小学校6年ともなれば難しい年頃でもありますし、喧嘩やトラブルは日常茶飯事だと思うんです。でも一方で、それが人を殺すまで行ってしまうの？っていう疑問は当然ありますよね。学校で同級生が同級生を殺したっていうことは、つまり同じクラスメートにとっては、一方の友達が犠牲者で、一方の友達が加害者っていうことになるわけですね。とてもじゃないけれども、小学校6年生の子供たちに整理できる状態ではないわけです。

ここは新聞記者、他のメディアもそうですけども、事件の動機、犯行の対応、計画性の有無、少女の生い立ちから家族構成まで、やっぱり徹底的に取材をするわけです。

さっき佐世保支局は3人しかいなかったって言いましたけども、こういうときにどうなるかっていうと、3人じゃ当然まわりませんよね。でそのうちの一人の御手洗さんは、とても取材の、被害者当事者であるわけですから、残っているのは4年目の僕と一年生の記者しかいない。そういう状況で、ぞくぞくと本社から応援の記者が集まってくるんですね。

事件の発生が1時前でしたけども、福岡から電車や車で記者がどんどん集まって、午後6時には20人近い記者が支局に集まってきました。

当然ながら、みな僕よりベテランです。なんていうのかな、イメージでいうと子会社にいきなり乗り込んできた敏腕サラリーマンみたいな人たちがばかりですね、職場は人だらけで、当時ノートパソコンのバッテリーがそこまで持たなかったのも、その支局のコンセントを皆で奪いあう状態。御手洗さんのことも知らない人も当然いるので、一種の躁状態に支局がなっているわけです。

自分はどうしていいかもわからずに、とにかくいわれるままにメモを上げるだけ。記事を書くなんてこともとてもできない。けれども事件が大きいので、支局の記者が一面の記事や社会面で記事を書くことなんて年に一回あるかないかっていう言い方をしましたけれども、翌日のこれは東京本社の紙面ですけども、一面でこんなに大きな記事が出ました。毎日だけでなく、朝日も読売もこれぐ

らいの大きな記事になりました。

それからは、夕刊朝刊一面社会面で毎日書きまくることになります。僕はいわゆる警察回りでしたので、夜回り朝駆けもしましたし、弁護士にも回りました。教育関係者の自宅も回りました。毎朝毎晩、警察幹部の家を回り、学校の先生も回り、家裁の裁判所関係者も回りました

簡単に言うと記事を書く側に回ったわけです。自分の直属の上司の娘が殺されてしまったのに、被害者側ではなく、書く側に回ってしまったわけですね。

当時4年目、27歳になってました。人でなしになり下がったなと思いました。その時先輩に、いい加減な報道で怜美ちゃんを二度殺すわけにはいかんのか、だからお前は記事を書かないといけなくて言われたんですね。その通りだ、そうだと自分も思って、書いたんですけど、でもそれって、そう思い込むことで、なんとか自分を保っているだけなんですよ。別にそんな感覚じゃない。第一何度記事に御手洗怜美ちゃんって書いても、その実感が僕にはわからないわけです。現実感がないままに仕事についているわけです。

当時の心境って当時は分からないんですけど、いまだったらわかるんですね。

ちょうど記者4年目、で仕事が楽しい、楽しくもなってきた、自分の仕事が充実しているとも感じていた。その時にこんな事件が起きてしまった。直感的に、一緒にこの悲しみに引きずり込まれたくない、って思っちゃったんですね。この悲しみに落ちたら、自分の人生が終わってしまう気がするということを感じたんだと思います。なので、記者という肩書、職種にしがみついて、なんとか自分を保とうと思っちゃったんだと思います。いまだたらざるいなと言えるんですけど、その時はその時で自分なりに必死だったんだと思います。

この事件で、加害少女はすぐに補導されたので、その後少年審判までの時間、少年審判で処分が決まるまで、だいたい100日間ありました。100日間僕もずっと休まずに、結局休むともたないので、100日間ずっと休まずに働いてました。

この少女って、さっき11歳って言いましたが、14歳未満って刑法の対象にならない、刑罰の対象にならないし、当時は少年院に行く年齢にも達してなかったわけです。触法少年っていうんですけど、14歳未満だと刑事罰は課されないわけですね。

今の児童福祉法の考え方だと、この女の子っていうのは加害者ではあるけれども、社会の被害者、ともいえるという捉え方をされるわけですね。親や環境が悪かったから、誤った育ち方をした、だから社会が救わなければいけない対象である被害者である、とも整理されるわけです。

口の悪い人は当時こんなことを言ってました。要するに犬にかまれるのと一緒だよ、しつげが悪かったわけでしょ。犬を責めてもしかたがないじゃない。

これが正しいかどうか僕にはわかりません。ただこの女の子は結局どこにいったかという、児童自立支援施設というところに入所することになります。要は国が親代わりになって育てなおしをする施設ですね。

少年審判でこの児童自立支援施設への送致がきまるんですけども、その時の決定、審判の決定の内容ってのはこんな内容でした。「社会や他者への共感が希薄で、怒りを適切に処理できないという特性があった女の子だった。インターネットや交換ノートの誹りで怒り殺意を抱いた。共感性を持っていない特徴のある未熟な女の子が、インターネットのチャットのトラブルや交換日記の表現をめぐって怒った。その女の子がバトルロワイヤルの小説やホラーに傾倒して、人の死の感覚が持てないまま人を殺してしまった」というようなことを審判で言っています。

身も蓋もないですね。子どもの喧嘩で、殺意を抱くっていうレベルでない。

ただこういう喧嘩っていまだったらラインのなかだったりとかスマホのアプリ内であつたりとか、大人では見えない空間で子供たちがやっている喧嘩でもあるのかもしれない。日常的な話の延長線なのかもしれない。

この女の子は最終的にT県のK学院という児童自立支援施設に入ります。そこっていうのは刑務所でもないし少年院でもありません。罰じゃないんでね。

そこで小学校を卒業します。司法手続きはその少年審判で終わりなので、マスコミとして何か報ずるものはありません。でもやっぱりわだかまりが残るんですね。もやもやするんです。

ただ、一方では日本全国どこでもいろんな事件がいま起きているので、やっぱり社会の関心がいつまでもこの事件だけに集まるってことはないわけですね。時間が経つにつれて、社会の関心ってのは薄まっていくわけです。

ただ自分のなかでは整理しがたい気持ちはずっと残っているわけです。でどうしようかって思った時に僕が何をしたかという、この女の子父親に会いにいったんです。

学校で起きる子供の事件って、学校だけで終わるかっていうとそうではないですね。やっぱり親の責任とか、親はどうしてたのかってことは必ず問われるわけです。そこで当然ながら事件発生直後は、加害者の自宅にマスコミがいっぱいいて、当時はメディアスクラムというのはそんなに話題になってなかったですし、働き方改革もなかったので、24時間体制で、各社が加害者の家の前で張ってたんですね。

当然ながら、加害者側にも生活があるので、スーパーに買い物に行ったりとか、自分の仕事に行ったりとかって、家から出なければいけないタイミングってあるわけですね。そこの出るタイミングを狙って、マイクを突き付けて、今のお気持ちは、一言お願いします、みたいなことを事件発生直後はやっていたわけです。でも当然ながら父親はいっさい一言もしゃべりませんでした。

ずっとしゃべらなくて、事件がその少年審判が終わっちゃうともう誰も来ない、という状況になってたんです。

事件から半年後、冬のことでした。行ってみたんですね。

加害者の家ってのは、山奥の一軒家だったんです。暗い山道を車で15分くらい登るとようやくたどり着くような集落で、当然ながらその山の道での片側一車線もない、いわゆる一本道っていうやつですね、あの車線がない道で、当然ながら外灯もない。山の頂上近くに家があつて、一軒家なんですけども、まず玄関のインターホンが壊れていて、玄関が引き戸になっているんですけども、古

い家だと裸電球がぶら下がってますよね、あの裸電球がぶら下がっているだけ。ちょっと怖いなど思ったんですけど、「こんばんは」って、と声を掛けたんですね。そしたら加害者の父親が出てきちゃったんですよね。自分はまさか出て来るとは思わなかったもので、びっくりしてしまって、毎日新聞の記者ですって言って、その後何を聞くこともなく逃げるように帰ってきてしまったんですけども、会いに行ったら会えることが分かってしまったんですね。

それはもしかしたら自分じゃない記者が行っても出てきてしまうかもしれない、とも思ったので、会いに行くようになったんです。3日に一回くらい、当時の会社の人には、警察の夜回りに行きますと嘘ついて、行っていました。午後9時前後かな、に行ってたんですけど、最初は玄関先だったんですけど、段々打ち解けて居間まで通してくれるようになるわけですね。半年くらい付き合っ、一対一でした。

加害者側にも家族がいたんですけど、もう生活が立ち行かなくなってしまって、一家離散してたんですね。

さっき、加害者少女は施設で小学校を卒業したと言ったと思うんですけども、なぜ加害少女の父親が佐世保に残っていたかという、卒業証書の関係なんです。施設にいる子供っていうのは、施設卒業という肩書にするというわけにいかないの、その住民票のあるところの小学校の卒業の扱いになるわけですね。加害少女の父親は、その大久保小学校っていう小学校なんですけど、その大久保小学校の卒業にしたいという気持ちがあって、ずっとそこに残っていたんですね。一人だけ残ってたんです。そこに僕が会いに行ったということなんです。

あの、当初はなにをしゃべっていいのか僕もわかりませんでした。世間話をしたり、報道のされ方は一部どう思うかって聞いたり、で会社にはいっさい言わなかったんですね。なぜかという、会社に言ったら、記事に書けて言われるわけです。それは避けたかったんです。記事を書くっていうことが怖いという気持ちと、もしその加害者の父親がろくでもない奴だったら、そんなろくでもない奴のために記事を書くことは僕はやりたくない、という強い気持ちがあったんです。

なので、ずっと黙ってたんですね。ずーっと付き合いを続けていると、向こうも山奥で一人暮らしですから、だんだん僕の存在を待つようになってきてしまうわけですね。で自分自身としては逆に怜美ちゃんを殺した女の子の親になんで会っているのか、っていう疑問がどんどん強くなってくるわけです。自分でも整理がつかなくなるんです。その時に、だんだんだんだん父親の方は僕と御手洗さんのつながりを感じるの、距離を詰めて来るわけですね。御手洗さんにはどう謝ればいいのか、自分のことをどう思っているのかということ僕に聞いてくるんです。

答えられないんですよね。答えるのは御手洗さんへの背信行為だと思いました。で黙っていると、今度は、「川名さんは、私のことをどう思っているのか」と父親は聴いてくるんです。困ってしまって、詰まってしまう。僕は被害者ではないわけですよね、遺族でもない。

この加害者の父親は、当時月に一度御手洗さんに謝罪の手紙を書いていました。でも御手洗さんは読まなかったんですね。その理由ていうのは、読めば自分が壊れてしまう、という理由からでした。

そんな父親に、僕は3日に一回会ってしまっている。自分は被害者だと当初は思っていたんですけども、他人なんだなということを加害者の父親から事実としてつきつけられてしまったわけです。

ただ、だんだんだんだんいろいろ話をするなかで、問わず語りに加害者の父親も事件の話をするようになるんですね。当時、話題になっていたのは、加害少女がバスケットボール部を退部したっていうことが、やっぱり問題だったんじゃないかっていうことが報道されていたんです。

学校の放課後にあるミニクラブ、クラブ活動みたいなものだったんですけど、それにその小学校6年生の女の子たちが結構入っていて、でそこでグループが出来るといいんです。子供にとっては学校と家庭との間の中間の場所みたいなものですよ。

長崎の佐世保っていうと、仙台市みたいに遊び場があるわけではありませんし、息を抜き場所がないわけですね。そのなかで自分が楽しみにしていたバスケットボール部を親の言いつけで退部しなければいけなくなった。居場所が奪われたんじゃないかっていう報道があったわけです。

少女の孤立っていうのはネットをみると、たしかに浮き彫りになっていたんです。当時はまだツイッターなんてまだなかったんですけど、ブログはまあようやく始まっている頃で、最初のころ、この女の子はバスケの話ばかりブログに書きこんでるんですね。ところが、退部した後、たとえば事件直前のゴールデンウィークのころっていうのは、「どこにも行っていません。ゴールデンウィークひま。つかこの頃やばいっす。昼飯食べてからなにをしたか記憶ない。ゴールデンウィーク4日目。今日はため息出るほど暇でやんす。友達と遊んだりしないから。それ山の頂上で叫びたくなりますよ。」なんてことを書いている。孤独だってことは浮かび上がるわけですね。

当時、なんでこのバスケットボール部を親が止めさせたかという、勉強優先しつけのためだったという風に報道されていたんです。でも父親の言い分を聞いてみると、違ったようなんです。少女の家って、さっきも言いましたようにすごく山の奥なんです。全校児童130人位いる学校で3~4人がバス通学なんですけれども、そのうちの一人でした。

あの、この山道、車で15分とさきほど言いましたけれども、この山道が両脇が結構針葉樹、高い針葉樹でおおわれていて、片側一車線もない山道で、バスもですね、昼間でもライトをつけて走るような暗い道なんです。

このバスがですね、最終便が午後6時だったんです、冬は。バスケットボール部の終わる時間が、確か5時半くらいでギリギリだったんですね。もしその最終バスを逃すと歩いて帰らなければならない。冬、暗い道を年頃の女の子を一人帰らすわけにはいかなかった、というのがバス部を退部させた本当の理由だというふうに、父親は言っていました。

父親も、なぜ娘が事件を起こしたのかわからないとも言っていたんです。というのは事件の前日に、娘が読みたかった本を、アマゾンドットコムで注文したというんです。その本というのは、「チソン愛しているよ」というノンフィクションで、交通事故でガソリンが引火しちゃって、大やけどを負った若い女性が立ち直るっていうノンフィクションらしいんですけども、それを娘が読みたいと言っていて、その本をアマゾンで注文したよって伝えたら、屈託なく加害少女が笑ったというんですね。でその翌日に事件を起こしている。分からない、と言っていました。

どう整理していいか、僕自身もわかりませんでした。

加害少女の父親は、実は障害があったんですね。少女が生まれた直後に脳梗塞を起こしてまして、で半身が付随でした。で、母親がパートにでて仕事をしていて、父親は自分ができる範囲で保険代理店を営んでみたりとか、おしぼり屋をやってみたりとかして、子供を育てているのはどちらかという、父親側の方だったんです。娘をみる時間が足りなかったのかもしれない、自分が悪かって、というようなことを父親が言っていました。

もし父親がろくでもなかったら記事にしたくない思いがあったとさっき言いましたけれども、じゃあこういう話を聞いて、自分はどうすればいいんだろうと思ってしまったんです。むしろ、悪かった、ろくでもない父親の方が、振り上げたこぶしが下せるんじゃないか、とも思った。

で、この加害者の父親に会っていたことは会社には言ってませんでしたけれども、御手洗さんにも言ってませんでした。ただ書いたほうがいいんじゃないかという気持ちも強くなってきて、この加害者の父親ってのは結局佐世保からいなくなります。やっぱり生活が立ち行かなくなってしまったんで、そのタイミングを狙って、というかそのタイミングで記事を出しました。

結局、これが記事なんですけれども、やっぱり分からないものは分からないということを書いたほうがいいんじゃないかと思って記事を書きました。

学校、子供、親。事件とか、とんでもないことが起きる前までは、分かりあえているような気がしていても、ひとたび何か起きてしまうと、全然わかってなかったということがあからさまになってしまうわけですね。それは規模は違ったとしても、いろんな学校、いろんな家庭で起こりうる話なんじゃないかなとも思います。

この事件でいろんな人取材をしたんですけれども、一人だけ取材しなかった人がいるんですね。それはさっきもちょっと言った御手洗怜美ちゃんのお兄さんでした。

当時14歳。中学3年生。学校で起きた子供の事件の被害者ですね。中学3年ですから。彼自身もまだ学生でした。当時みんなは、このお兄さんに対して腫れ物に触れるようでした。ちょうど3歳違いだったんですけれども、怜美ちゃんとすごく仲が良かったんですね。お母さんが亡くなっていて、父親は多忙な新聞記者でしたから、いつも二人で遊んでいた。それだけに誰も助けられなかった。彼に話を聞くなんてできないし、聞きたくもないと僕も思いました。でもなんだか聞かなければいけないような気もしたんですね。

ただ子供の取材って、その前から僕苦手で、自信がもてない。さらにこんな大変な事件の場合、もし彼を、彼に話を聞くことで傷つけたとしたら、自分では責任がとれないなと思ったんです。責任の範囲を超えてしまうなと思ったんです。

一方で他の犯罪被害者の話というのものも、この事件を機に聞くようになっていたんですけれども、いろんな事件の当事者の話を聴くと、兄弟の話って一番大きなテーマでもあったり、一方でタブーであったりも、触られたくないテーマでもあったりするんですね。見過ごされがちな存在なんだなということに気づいたんです。どうしようかとすごく悩んで、自分のなかで整理をつけて、この14歳のお兄さんが二十歳になったら話を聞こうと、二十歳になったら自分の言葉に、彼も責任を持てるだろうと、そういう勝

手なルールを作って、二十歳になって、彼に話を聞かせてもらえないかと頼んだんです。

事件から6年が過ぎていました。わりに、当時長崎の大学生だったんですけれども、わりにすんなり二つ返事でオーケーが来たんですね。僕は当時福岡の記者でしたけれども、電車に乗って長崎まで行って、お兄さんに会いに行ったんです。

このお兄さんに、まずどうして話を聞くってことをオーケーしてくれたの、と聞いたら、僕に話を聞きに来てくれたのは川名さんが初めてです。誰も僕の声に耳を傾けてくれなかったって彼が言ったんですね。ええ～としびれてしまって、みんながはれ物のように、はれ物に触れるような感じで避けていた彼を、彼は知っていて、彼自身は苦しんでいたけれども、彼に声をかけてくれる人はいなかった、ということだったんですね。

実は彼は事件の真相をよく知っていたんです。事件の前にインターネットや交換日記でちょっとしたトラブルがあったんですけれども、かれはそのトラブルを知ってたんですね。

なぜかという、事件前に怜美ちゃんから相談されていたっていうんですね。どうしたらいい？って。でもどうしていいか自分でも分からなかった。それはそうですよね。年頃の女の子ですし、勝手にアドバイスしても、それが有効かどうかわかんない。本来ならば、ここで大人が出て来るべきタイミングなのかもしれないけれども、やっぱりお兄さんとしては父親である御手洗さんに相談できなかったっていうんですね。それは子供同士のやっぱり約束だから、親にチクるといのは子供同士にとってはタブーなわけですよ。だから彼は親にも伝えなかった。そしたらこんな事件が起きてしまった。ものすごく苦しんだわけです。

一方で、御手洗さん、お父さんのほうですね、当時新聞記者としてきちんと会見したり、手記をだしたりとか、はたから見ると立派な対応をしていたと思うんですけども、全然違うっていうふうにそのお兄さんは言うわけです。二人の時は目の焦点が合ってなかった、親父は死んじゃうんじゃないかって思った。でその時彼はなにを思ったかという、「俺が泣いたらだめだと思った」というんですね。

自分まで迷惑かけちゃだめだ。子供である自分が迷惑かけたら御手洗さんが死んじゃうかもしれない、と思っただけです。子供って大人が思っている以上によくみているわけです。そして大人が信じられない速度で成長してしまうときもある。でもそれがいいかっていうといいわけじゃないですよ。

彼は感情にふたをしてしまいます。中学を卒業して、御手洗さんが福岡に移動するのに合わせて、彼は福岡の高校に入学します。親である御手洗さんは場所を変えることで職場復帰ができるようになりました。でも親が日常を取り戻すと子供が限界に達したんですね。バケツの水が全部ひっくり返った、というのが彼の言葉です。

高校に入学して、教室に行けなくなって保健室通いが始まります。でも親を心配させたくないから、それを御手洗さんには言いません。結局御手洗さんが気づいた時には半年後。お兄さんは高校を中退せざるを得ない状況になっていました。それから臨床心理士や精神科医まわりをしたみたいなんですけども、でも全然だめでした。

あの、犯罪の被害者って、同時にみんな一緒に苦しむと思いがちですけども、実は違うんですよ、みてる時。時差がやっぱりあります。親である時、子供である時、立場が違うとタイミングも苦しみ方も違

います。じゃあそれを家族で話し合えばいいじゃないかと思うかもしれませんが、家族で話し合うことはできないと思います。みていて他の遺族もそうですけど、生傷と生傷をぶつけ合うようなことってやっぱり出来ないですよ。こういうトンデモない事件にみまわれると、家族が結束すると思いがち、というか思いたいんですけど、逆に崩壊する家族も多い、理不尽だけどそれが現実だと思います。

御手洗さんにそのお兄さんはいっさいそういう相談はしてなかった。精神科医をまわったけど、なんで役に立たなかったかっていうと、彼の言葉で言うと、「結果的には役に立ちませんでした。頭のなかでめぐっていることを言語化できないんです、自分は。カウンセリングに行くと「話してください」というのが基本なんですけど、俺は確かに話したいことがある、でも話したいことを言葉にできない。話したいことを、言葉にできないことを、伝えたくてもその言葉さえない。結局、そこで話したのは、事件があって、そのことで悩んでいる状態で動けませんっていう事実、外枠、アウトラインだけ。でも俺の目からは、それでカウンセラーの先生たちが満足しているように見えるんです」と彼は言っていた。

よくも悪くも新聞記者って、踏み込むのが商売なんですね。彼が話してくれると分かって、長崎に会いにいった、その時に、昼飯を食べた後から、午後1時くらいから話をして、ふと聞きたいこと、どうしたのって知りたいことがいっぱい出てくるんです。同時に彼も話したいことがありすぎて、1時過ぎから話をして、で6時くらいまで終わらなくて、一緒に、もう二十歳を超えていたので、一緒に居酒屋に行って、居酒屋で飲みながら話をして、終電までいて、それでも話が終わらない。次の週にまた会いに行って話をしてってことを何回か繰り返して。

そのたびに、僕はICレコーダーで彼の話を取っていたので、それを文字起こしたんですね。そうすると彼自身も文字起こした文章を読むことによって、自分がどういう状況にあるのかが整理されてくる、そんななんか不思議な関係がしばらく続いたんですね。

いろいろ話をしていくなかで、加害少女についてどう思うのって聞いたことがあったんです。そしたら彼は普通に生きて欲しいって言ったんですね。えーって思って、自分の妹を殺した人、女の子をそんな風に思っているのかって言ったら、彼はそう思うって言ったんですね。結局そう思ってしまった、っていう言い方をしていた。

どういう子なのかっていうのを、本にしたところから引用するんですけど、ちょっと読みますね。

「彼女には普通に生きて欲しい。波乱万丈なものは僕自身が要らないっていうものがあるし、一回の謝罪があれば、あとはそれなりの人生を歩んで欲しいです。こっちはこっちで普通に生きていくつもりだから。相手もまだ何十年も生きなきゃいけないし、ずっと謝られてもこっちが困る。特に危ないことをせずに普段の生活を大切に生きて欲しいということです。僕は相手のこともトラブルの内容も、地味に知っちゃっているから、それ以外にあまり言葉は思い浮かばない。他にあまり望むものはないから。だって怒ってもどうしようもないって言ったらおかしいけれど、取り戻せるものは何もないですから。最初は怒っても後は静まれば、自分の生活をしていだけだと考えるしかない。諦めじゃなくて、結果として僕が前に進めるから、一回謝ってほしい。結局、僕、あの子に同じ社会で生きて欲しいと思っていますから、僕がいるところできちんと生きろと。謝るならいつでもおいでってそれだけ。」って彼は言ったんですね。

それを聴いて、あーこれは新聞記事にはできないなと思ったんですね。新聞記事のボリュームではこの



言葉の強さを伝えきれないなと思って、それで「謝るならいつでもおいで」って本を僕書いたんです。それを書いたことによって、今日ここに呼ばれたということになると思うんです。

「学校で起きる子供の事件」、それをどう整理するのか、答えらしい答えはないですよ。でもそこに当事者だけいても救いはないとはいえると思うんです。誰かが関わらなければならない、その事実はあると思うんです。

事件から3年後になるんですけども、「有楽町」っていうコラムで、御手洗さん、お父さんの方ですね、コラムを書いているので、ちょっとそれを読んでみたいと思います。「受け入れがたい現実に直面した時、人は心をどう保つのだろうか。3年前の今日、娘を失った。多くの励ましや慰めの中に、死者からのメッセージに曲をつけたCDがあった。死んだ人が残された人に、自分は死んでなんかいない、姿を変えて周りにいると伝えていた。何をいつているのだと反発した。がいつしか繰り返し聞く自分がいた。ある時娘の写真を見ていた友人が言った。「いなくなって悲しいという気持ちは消えないだろうけど、幸せな思い出を沢山もらったっておもえないかな。」ふざけるなどその時は思った。でもなにかが心に引っかかった。ある朝、ベランダに見慣れない小鳥が来た。ハッとした。あのCD「千の風になって」の、鳥になって残した人を目覚めさせるという内容がよみがえった。姿を変えてきてくれたのか。動悸が激しくなるのがわかった。時はなにも解決してくれない。ただ友人の言葉を振り返り、CDを聞き返すたびに感じている。少しづつでしか心は現実に折り合いをつけられないと。」

この幸せな思い出を沢山もらったと思えないかなと言ったのは、会社の後輩でした。御手洗さんの身の回りの世話を、事件当時していた人でした。誰かがどこかで関わる、隣人でしか言えないことって多分あると思うんです。

「学校で起きる子どもの事件」ではなおさらなんじゃないかなと思います。子供は大人以上にやっぱりショックを受けることが、ショックを受ける度合いが大きい、一方で大人よりもそれを発する言葉がない。それが大きな現実だと思います。そこにどうやって寄り添うことができるのか、それは色々な立場によって変わってくると思うんですけども、それを考えることっていうのがとっても大事なことなんじゃないかなと思います。そんなことを今日上手く伝えられればいいなと思って、こちらに足を運ばせていただきました。

ご清聴、どうもありがとうございました。